『バトル・オブ・ザ・セクシーズ』

監督：ジョナサン・デイトン／ヴァレリー・ファリス
脚本：サイモン・ボーフォイ
出演：エマ・ストーン／スティーヴ・カレル ほか
2018年／アメリカ／121分

予　告

ブルーレイ発売中
デジタル配信中（購入／レンタル）
©2019 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC.
発売：ウォルト・ディズニー・ジャパン

社会を旅する
シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

男女の賞金格差是正へ 一歩を進めた50年前の試合

アーヤ藍

「男性のほうが迫力があっておもしろい」
「男性のほうがファンが多くて稼いでいる」

そうした言葉を盾に、いまも男女間の賃金格差が残っているのがスポーツの世界だ。男女別々に試合等が行われることもあり、何をもって「平等」とするかという議論は、いずれの種目においてもまだ明確な結論が出ていない。しかし、スポーツ界における賃金格差が問題視されはじめたのは最近のことではない。本作は、今からちょうど50年前の1973年に、テニス界において賞金の男女平等を求めたビリー・ジーン・キング選手の奮闘を描いた作品だ。

女子テニスの世界チャンピオンとなった29歳のビリーは、全米テニス協会が発表した女子の優勝賞金が、男子の8分の1だったことに抗議の声を上げる。しかし、まったく取り合ってもらえなかったことから、全米テニス協会を脱退し、仲間たちと女子テニス協会を立ち上げることに。そんなビリーたちに目をつけたのが、元世界王者のボビー・リッグス。かつてはウィンブルドンで優勝するなどし、社会にもてはやされていたが、55歳となった今は、表舞台に出る機会もなく、会社員として淡々と日々を過ごしていた。そんなボビーは再び脚光を浴びることを期待して、ビリーに「性差を超えた戦い＝バトル・オブ・ザ・セクシーズ」を挑む。

折しもアメリカではウーマン・リブ運動が活発だった。ボビーはあえて、「女は男にかなわないと証明するための試合だ」などと挑発的な言葉を発し、社会を焚きつけていく。試合は世界中の注目を集め、会場だけでも3万人、テレビ中継等も含めると全世界で9千万人以上が観戦したと言われている。結果的に、この試合でビリーが勝利を収め、全米オープンの男女賞金同額化につながった。

しかし、それから50年経った今もテニス界における賞金格差は残り続けている。映画の中でビリーが発した印象的な言葉に「私は女が（男より）上とは言っていない。敬意を払ってほしいだけ」というものがある。残念ながら、いくら女性が試合で勝利を収めても、女性に対する「敬意」が生まれるとは限らない。そしてその意識が変わらないことが、今も同一賃金が実現されない理由のひとつなのではないだろうか。

もうひとつ、この映画で印象的なのが、シンプルな「勧善懲悪」で描いていないことだ。たとえば、ボビーは男性という点ではマジョリティだが、実はギャンブル依存症で、それゆえに家族とうまくいかない不安や孤独も抱えている。ビリーも、男女の差別に対して抗う姿勢は確固としているが、自分のセクシュアリティに関しては周りに知られることを恐れ、葛藤している（1981年にレズビアンであることを公表）。はたまた、作品の中で最も男性至上主義的な登場人物は、発言の節々に差別意識が滲み出るものの、社会的地位は高く、一見とても「紳士的」だ。

そんなふうに本作の登場人物たちには人間の複雑さが映し出されている。マジョリティだけどマイノリティ。強そうだけど弱さもある。見えにくい差別と日和見主義…。複雑な人間が織り成す社会を変えていくことの、根深さと果てしなさのリアリティが、いい意味で余韻に残る作品だ。

あーやあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル（株）に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。